

高浜中学校だより

平成 31 年 1 月号 NO9

平成 31 年 1 月 1 日は、暖かい陽のさすとても穏やかな日でした。皆様におかれましては、ご家族おそろいで新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。



今年は暖冬と言われています。13

日の成人式も柔らかな陽がふりそそぎ、女性の晴れ着もよりいっそう引き立ったように思います。

しかしながらこの暖冬、暖かくて過ごしやすいのかもしれませんが、積雪が少ないまま冬が終わりますと、農家の人たちにとって稲作の水不足が懸念されます。寒い冬はあまり好きではありませんが、昔から自然と共に暮らしてきた私たち、やはり四季の区別がはっきりしている方がよいのかもしれない。

稚心を去る

1 月 8 日に第 3 学期の始業式を行いました。そのときに、越前藩出身の幕政改革者、橋本左内先生の「啓発録」から引用して、「稚心を去る」という話をしました。先

生は 14 才で将来の志を立てられますが、そのときに学問に対する心構えも書かれています。そのひとつが「稚心を去る」です。勉強をしようとするときに嫌になったり、また、少し勉強ができるからといってそれを鼻に掛けたり、勉強ができないからといって自己嫌悪に陥ったりすること、これら全て「幼い心」であると書いておられます。これらを払拭することの大切さを全校生徒に話しました。

この言葉は、ある意味、特別なことではありません。しかし、この当たり前のことが生徒に十分に身につけているでしょうか。先生の教えは、目の前の点数を上げるためだけに書いておられるのではありません。自分の将来の夢を実現するためには「稚心を去る」ことが大切であると教えられています。そして、単に将来の夢を実現するためだけでなく、前向きに生きること、また物事に挑戦するときの心構えについても、私たちに語られているような気がします。

生徒のみなさん、学習に向かうのは辛いことかもしれません。しかし、今の中学生の時期に「稚心を去る」努力をしてください。

やさしい心をありがとう

「夏の日のことです。

急に雨が降ってきて帰ろう思いUターンした時、うまくまわれなくて、自転車ごところんでしまいました。

その時、男子生徒の2人が『大丈夫ですか』と自転車をおこしてくれました。

『ありがとう、大丈夫です』と、やさしい2人の中学生に、もう一度お礼を申し上げたくて。名前も聞いていませんので、誰だったかわかりません。

『やさしい心をありがとう』見て見ぬふりされてもしかたがないのにうれしかったですよ。

2人の中学生に幸多かれと祈っています。」

<2018年度 高浜町人権作品コンクール

入賞作品>

この作品を読んだとき、心がほっこりと温まりました。高浜町にこのような心温かい男子中学生がいることに、とても誇らしく思い、日本の将来に希望が見えるなど感じました。

本校では、ボランティア活動を推進しています。12月までで、のべ80名の生徒が様々な場所で活動しています。その中でも、年の瀬の迫った12月30日に、本校から2名の生徒が、社会福祉協議会の方と

もに、1人暮らしの方の家におせちを届けるという活動を行ってくれました。雪の降る寒い日でした。2人の生徒のみなさん、優しい心を届けてくれてありがとう。みなさんの将来に幸多かれと祈っています。

まだあります。2学期の中頃だったと思います。私が車で出勤し

てきたとき、校門の門扉が閉まっていた。門扉を開けるために車を降りようとしたとき、そこに登校してきた女子生徒が、私の姿を見て門扉を開けてくれました。嬉しかったです。そして、やさしい心をありがとう。



校歌に心をのせて

3学期最初の生徒集会の時、生徒会の提案で「校歌を元気よく歌おう」という呼びかけがありました。これは、生徒会が2学期末に学校生活の反省を行ったとき、学校の課題として取り上げてくれたものです。集会の時、生徒会のみんなは各学級の後方に並んで大きな声を出して歌ってくれていました。全校のみなさん、生徒会のみなさんの気持ちを受け止め、60年間歌い継がれている我が校歌に心をのせてください。